

<<東北魂>>を鼓舞する  
電子新聞

発行所 株式会社遊無有

〒207-0005  
東京都東大和市高木3-315-1-2-2  
http://www.yumuyu.com/  
e-mail:yumuyu@wj8.so-net.ne.jp

# 東北復興

Rising up, TOHOKU!

2016年(平成28年)5月16日 月曜日

無料

## 第48号

毎月発行

創刊2016年(平成28年)5月16日 月曜日

### 「東北」誕生の記憶と忘却

#### 東義大学校人文大学助教授 鈴木啓孝氏寄稿

歴史の本質は記憶ではなく忘却である——ある時代の誰かが何らかの目的をもって何かを記憶しようとし、そしてそのために何かを記録しようという場合、その目的にとって都合の悪い記憶と記録に関しては積極的に消し去ろうと努めるはずだという場面を想定しなればなりません。

あるいは、別に都合が悪いことはないのでけれども、単に記憶の必要がなければ記録もなされないという可能性があるでしょう。この世で生じたすべてのことを記録し、記憶しておくことなど人間には不可能です。から、これはむしろ自然の摂理というべきです。

このように考えてみると、現在に至るまで、偶然にも、そして幸運にも保存されている過去の記録と、そうした記録に基づいてかろうじ

#### 執筆者紹介

鈴木 啓孝  
(すずき・ひろたか)  
東義大学校(韓国・釜山市)人文大学日語日文学科助教授。東北大学文学部、東北大学大学院文学研究科卒業。博士(文学)。専門は近代日本思想史。



て記憶されている歴史の裏に、それに百倍(いや万倍? 億倍?)する、無数の忘却があるのだという厳然たる事実を思わざるをえません。

たとえば、国家が認定した教科書の用語に従って叙述された歴史などは、こうした無数の忘却と表裏一体の関係にある、ごく限られた記録と記憶でしかないわけ

さて、歴史についての以上の定理を前置きとして、今回この場をお借りして考えてみたいのは、日本の「東北地方」という名の下における歴史の記憶と忘却のことです。それでは、このこと

#### 「東北」と「西南」

今でこそ、ごく当たり前に通用している「東北地方」という地域名ですが、この名称が青森・岩手・宮城・秋田・山形・福島のいわゆる東北六県を指すものとして固定されたのは意外に遅く、だいたい明治三〇年代のこととされています(河西英通「東北」中公新書)。古来、この地は「奥羽」ないし「みちのく」と呼ばれていました。それが「東北」に交差して、たかだか一〇〇年の歴史しかないのです。

地域概念は「東北」単独で発生したわけではありませんが、明治維新後の空間認識として、国家の領域全体を北から順番に、「東北」「関東」「中部」「関西」「西南」という五つのブロックに整理

もろろん、日本列島の最北には「北海道」、そして最南には「沖縄」が存在しています。しかし、明治改元前後の認識ではこれら南北両端の領域は「外地」として。維新以後、新政府の方針にしたがって「内地」からの移民と、現住民の日本国民としての同化が推し

また興味深いことに、上記五つの区画の内の「西南」については、ついに固有の地域名として定着しませんでした。今もなお、「中国」「四国」「九州」という古来の呼

称がそのまま通用している通り、三つに区分されます。これらの地域を一つにまとめて「西南地方」という新しい固有名に呼び替える動きはまったくなかった、

というわけでもないようです。その痕跡は、たとえば「西南戦争」や「西南学院大学」などの事件や組織の固有名から、わずかにうかがうことができるでしょう。

それでも結局、「東北」の反対側は「西南」となりませんが、これら地域の名称は、これまでも、そして

これからもしばらく、「中国」「四国」「九州」という名の下で記録され、記憶されるはずですが、そのため、たとえば「九州」ならば、現在は七つの県に区分されているがもともとは九つの国があったこと、だからこそ各地域には必ずしも

文化が息づくこと、「中国」や「四国」とは確実に区別できることなど、一連の記憶を呼び起こしやすくなっています。あえて「西南」とならなかったことによつて守られた記憶というものがあるのです。

#### 「奥羽」から「東北」へ

それでは、「中国」や「四国」、そして「九州」と異なり、なぜ「奥羽」は「奥羽」のままではいらなかったのでしょうか? 明治において、由緒ある古来の名称をわざわざ捨て、あえて「東北」と呼び替えられなければならなかったのは、一体どうしてなのでしょう?

この問題について考える手がかりを得るべく、ここでは、「東北」という地域名が定着する前段階の明治二一年(一八八八)八月、新聞「東京電報」に掲載された「東北人士の振興、後藤伯」というタイトルの記事を取りあげます。この記事の要旨は次の四つです。

一点目、ここでは「東北人」ということばが「新出の名称」とされています。

「東北」とは、時に「奥羽五州」あるいは「三陸二羽」を指し、また「岩代」と「磐城」の二国のみならず、「常総」と「両毛」、さらには「越後」まで含むこともありました。つまり「東北」は、現在の東北六県はもちろろん、東北六県から福島県を除いた狭い領域、あるいは茨城・群馬・栃木・新潟の各県域を加えた広い領域を指す場合もあったのです。

明治二一年当時、「東北」は流動的な地域概念で、必ずしも境界が定まっていなかったことがわかります。二点目、「東北」という新しい名称が定着すれば、「奥羽」という昔からの呼称に込められた他地域からの蔑視を取り去ることができるという主張です。古来

「奥羽」は、「蝦夷地」とともにほとんど未詳地とされました。むしろ「蝦夷」を含蓄する地域概念でした。しかし明治となった今、「東北」という新しい地域名が定着すればようやく「類似蝦夷」という蔑称から解放

され、「蝦夷」ではない別の存在となれます。そして「関東」「中部」「関西」「西南」といった他の地方と同等の地位を獲得できるのです。

三点目、「奥羽」という伝統的な名称に替わって新しく用いられる「東北」ということばには固有の意味がなく、そもそも方角を意味する一般名詞に過ぎません。それがここで積極的に評価されます。なぜなら、

かつての「奥羽」が近年「東北」という方角によって名指されるようになったのはこの地域が「日本国の東北地方」と称するのを許されたからこそです。「奥羽」という地域が「奥羽」としての固有性を消失して、「日本国の東北」あるいは「大日本の一部」となるのは歓迎すべきことでした。

四点目、幕藩体制の下で「津軽」「南部」「仙台」「久保田」「庄内」「米沢」「会津」など各藩の固有名においてバラバラだった諸地域が、「東北」として一つに統合することによって大きな政治権力を獲得できるという可能性が示唆されます。記事のタイトルにもあるように、明治二一年八月とは、ちょうど、薩長藩閥政府に対抗する力を得るための大同団結運動を推進した当時の後藤象二郎が、東日本の各地を遊説していた時期にあたります。「奥羽」は「奥羽」としての固有性と各藩の固有性を共に解消し、新たに「東北」の名の下で大団結するべきだという「東京電報」の主張は、後藤の政治行動に触発されるかたちでまとめられたものでした。

#### 明治人の共通意志

明治初年の時点で、他地域の人間が「奥羽」ということばを用いる時、そこには隠しようのない侮蔑の響きがあったのです。古代以来の歴史をかえり見た時、「みちのく(道の奥)」には、

国家の辺境、「蝦夷」が暮らす未開の広漠とした土地というイメージがつきまといまいます。のみならず、直近の戊辰戦争においても、列藩同盟を結んだ「奥羽」は、そろって敗者の役回りを演じました。

王政復古を実現した明治維新において何らなすことがなかった「奥羽」。外部からの厳しい視線にさらされ、侮蔑されてしかるべき「奥羽」のイメージは、いつしか「奥羽人」たち自身の自己評価ともなりました。明治の新しい時代が始まった時点で「奥羽人」たちが実感せざるをえなかったであろう新しい国家からの疎外感とは、かくも深刻なものだったのです。

それにしても、こうした侮蔑されるべき、疎外されるべき地域の発生とは、はたして誰が望んだことなのでしょう? 現に「奥羽人」である人々にとっては、もちろん、忌避すべきことでした。のみならず、実は、近代国民国家を作する新政府の為政者たちにとつても、これは決して歓迎すべきことではなかったのです。

西欧列強に対抗する独立国家・日本を経営するために、従来の封建的割拠主義など一掃し、地域間の差別感情や対立感情も速やかに消し去らねばなりません。かくして、その響きによって他地域との優劣関係を生み出してしまふ「奥羽」に替わる、新たな名称が要請

されました。「東北」の呼称はこの流れで発生したもののなのです。すでに述べたように、この用語選択は、日本列島の全体を俯瞰して、「東北」「関東」「中部」「関西」「西南」という五つの地方に整理した、きわめて近代的人間的な国家認識に基づきます。上の記事を書いたのは、

陸羯南(くがかつなん・一八五七〜一九〇七)という人物です。明治年間に勃興した日本ナショナリズムの旗手として知られる、ジャーナリストの草分けの一人でした(一般には、やがて新聞『日本』の社長兼主筆となり、正岡子規を世に出したことで有名でしょう)。彼は弘前藩の下級武士の家に生まれた「津軽人」であり、生粋の「奥羽人」です。そんな彼が、「奥羽」から「東北」へという当時の流行を後押ししていたことになりました。

明確な国家的ビジョンをもって、日本全体のあり方を再編成しなければならぬと考えた明治の人々の共通意志によって「奥羽」から「東北」への呼び替えが推し進められ、いつしかその実現に至りました。それは、日本ナショナリズム確立のため、新たな日本の出発のために不可避時代の流れでした。

現代の我々は、そうした明治における記憶と忘却の下流を暮らしていることになるのです。

国家の境界、「蝦夷」が暮らす未開の広漠とした土地というイメージがつきまといまいます。のみならず、直近の戊辰戦争においても、列藩同盟を結んだ「奥羽」は、そろって敗者の役回りを演じました。

# 「SOSムースブルグ子どもの村」の視察(その1)

## 「子どもの村東北」村長が語る その③

### 「子どもの村東北」村長

今野和則氏

前宮城県立石巻支援学校長。宮城県行政職を経て公立小学校教員。宮城県教育庁特別支援教育室長補佐、気仙沼支援学校長、宮城教育大学付属特別支援学校副校長を歴任。東北福祉大学で後進を指導中。石巻市出身。



### 1 ヨーロッパにおける「SOS子どもの村」とは

「子どもの村東北」への来村者は、開村約1年で2000人を超えました。今年の1月に開催された琴のチャリティ・コンサートで、2000人目の来村者

に記念品を贈らせていただきました。

その来村者の中には、外国からのお客様もいます。オーストリア、ドイツ、フランス、カナダ、アメリカ合衆国と様々な国から来村され、それぞれの方々をもてなしながら、多くのお励ましを頂戴しています。

中でも印象深いのが、既に複数回村を訪問いただきドイツ市民からの支援金や様々なメール情報をいただいている、ドイツ在住の医師・Kご夫妻です。当時初対面の私に、K奥様はこう切り出しました。

「日本の警察には驚きました。仙台駅の交番で、「日本の子どもの村は、どこですか?」と尋ねたら、答えられないのです。ドイツでは、あり得ません。「子どもの村」を知らない国民はいないのです。」

同様のことを、フランスからの来村者も語ってくれました。いったい、ヨーロッパの子どもの村とは、国

民にとってどういう存在なのか?

さらにオーストリアの「SOS子どもの村インターナショナル」から、開村式にお招きしたポツシュ博士からは、オーストリアの子どもの村の育親(日本で言う里親、ヨーロッパではマザーと呼びます)は、2年間の研修期間を終えて後、仕事に就くとの情報を得ていました。その期間で彼女たちは何を学ぶのか?そして何を大事にしなが

ら生活しているのか?子どもの村開村後、子どもを受け入れるまでの時間を活用し、さらに民間企業の助成を受け、オーストリア視察に向かった私にとって、二つの大きな疑問がこれらでした。

### 2 「SOSムースブルグ子どもの村」の視察

子どもの村東北から5人、福岡から4人、総勢9人の視察団が、2015年1月15日、オーストリアに向か

いました。この視察報告書は、既にまとまり、このオーストリア訪問が、昨年の「東京フォーラム」等の開催と、日本の「社会的養護」を、子どもの権利を大切に

する立場から転換しようとする「SOS子どもの村 JAPAN」を活動につな

がります。ただし、私個人にとって

とが中心の旅で、そのことがヨーロッパの歴史や民族性、そして国民の生き方の日本との違いに気づきつつかけになったように思います。つまり、私の個人的目論見は、子どもの村東北を育てて行くにあたっての育親(里親)・マザーの存在を学ぶことでした。そこで、当初のプログラムを変更して、2人のマザー、そして既に退職したマザーとも面談する機会を設定していただきました。

### 3 育親(里親、マザー)との出会い

まず、2人のマザーとの面談の機会を得ました。単刀直入に2年間の研修について、教えていただきました。

あなたは、2年に及ぶ研修で何を学んだのですか? 「自分自身について、自分は何者かについて学ぶ日々でした」

具体的には、どういうことですか? 「それは、自分の長所、欠点をことごとく明らかにするといいことです」

何のために? 「子どもは、本能的に、親や指導者の弱点を突いてくるものです。その時に、自身が自分をわきまえていないと、不適切な対応をしてしまいます。適切な対応をするためには、自分を知

っておく必要があります。」これは、「自己覚知」と



いうことで、教育や対人支援を行う場合の基本的な専門性なのですが、日本では

さほど重要視されていないように思えますし、それが多くの教育や福祉の世界で、様々な課題を生む遠因かもしれないと、この「自己覚知」について、まずマザーから坦々と語られたことに驚きを覚えました。そして、

要するのだということも、うなずきました。

続く質問は、2人のマザー及び退職されたマザー(退職したマザーも、希望により「子どもの村」で生活しています。主に、徴兵制度の代替えとして、軍隊ではなく、「子どもの村」でボランティア活動をしている若者の衣食住の支援に当たっているのです。)に

共通のものです。あなたが、子育てで大事にしてきたことは、何ですか?

「食事です。家族で囲む食卓を、何よりも大事にしてきました。手作りの食事が、子育ての原点です。」

4 若干の考察  
例えば、第2次世界大戦

で、廃墟と化したオーストリア。そこに残された戦争孤児の子どもたちと、女性。その生活支援のために始まった「子どもの村」です

から、集まった女性たちの研修の大切さは、勿論のこと、食事に事欠く子どもたちへの対応を重視したことは、まさにマザーたちのお話から窺い知ることができました。

しかし、この自己覚知と家族で囲む食卓の大切さを教えられたことは、私にとっての大きな糧となりました。

さて、もう一つの疑問への回答と、ヨーロッパ文化と日本のそれとの違いにか

かる気づきという副産物については、次回に述べさせていただきます。

編集者の  
独り言

ほんとうに三陸の海産物料理で  
新機軸は打ち出せないのだろうか  
素材の素晴らしさは十二分に理解  
しているが、消費者をあとと言わせる  
新料理は登場しないのだろうか

なぜ三陸海産物を用  
いた画期的なレシピ  
が出て来ないのか

三陸の海産物の素材のす  
ばらしさは、すでに国内で  
は十分に浸透していると思  
う。海外での評価はこれか  
らかもしれないが、いずれ  
輸出が活発化すれば、評価  
が高まるのは自然の成り行  
きだと思ふ。

したがって、ここでこれ  
以上そのことを繰り返して  
言及することはしない。

問題は、これまでも何度  
も指摘してきたように、海  
産物の付加価値率向上、す  
なわち、海産物を素材のま  
ま提供するのではなく、加  
工品にして付加価値をつけ  
ることであり、さらに突き  
詰めれば、画期的な三陸の

新たな海産物料理として提  
供することである。

加えて、それを三陸の地  
元で提供すれば、観光産業  
にもなつて、他にもさまざま  
な波及効果をもたらす、  
復興に寄与すると考えるの  
であるが、なかなかこうし  
たチャレンジが行われてい  
るというニュースを耳にし  
ることがない。

もちろん、三陸の水産業  
関係者も真剣に努力してい  
ることだろうし、それを否  
定しようなどとは少しも思  
つてもいないことはつけ加  
えておく。

新産業を産み出す力

新産業を産み出すために  
必要なものうち、主なもの  
は、モノ⇨素材等、資金  
事業アイデア⇨事業家、  
市場である。

前述のように、三陸には  
海産物というモノ⇨素材は  
十分にある。

しかし残念ながら、資金  
事業アイデア⇨事業家、  
市場は大いに不足してい  
ると言わざるを得ない。(こ  
の点も、事業家が存在しな  
いと言っているのではなく、  
不足しているということ言  
いたいのだということをは  
付記しておく)

資金は、また、従来から  
の復興型事業には投じられ  
てはいるが、新産業には潤  
沢に回ってこない。

市場は、復興関連である  
建設業などは活況を呈して  
いるが、その他の市場は大

震災前を下回る水準で推移  
しており、残念ながら、新  
産業の受け皿にはなりえな  
い状況である。

したがって、これらを創  
出しないと、三陸海産物を  
使った新産業はなかなか産  
み出せないだろう。  
では、これらの不足分を  
どう捻出していくのか。

復興ボランティアとの  
ディスカッションから

筆者は、当新聞の関係で、  
三陸水産業の復興活動に関  
与されているボランティア  
など多くの方々とお話しす  
る機会がある。

そこから筆者が得た、三  
陸水産業の今後の方向性と  
して以下のことが挙げられ  
ると考えている。

- ① 事業アイデア⇨事業  
家については、従来の事  
業の枠を越える画期的な  
ものが被災地には非常に  
少ないと言わざるを得な  
い現状である。
- ② 従来の事業の枠を越え  
る画期的な事業アイディ  
アを、そうしたことに慣  
れていない被災地の事業  
家がひねり出すには時間  
がかかる
- ③ したがって、画期的な  
事業アイデアも、首都  
圏に数多く集まる、ベン  
チャー精神にあふれた事  
業家に任せることが必要  
ではないか
- ④ 資金は、規制の多い公  
的なものをあてにせず、

民間資金でまかなう必要  
があるし、その方がはる  
かに良い

⑤ 民間資金を集めるため  
には、画期的な事業アイ  
ディアが必要である

⑥ 市場は、まず首都圏等  
の巨大市場を狙うべきで  
あり、三陸被災地での既  
存の市場ではない

⑦ ただし三陸で、観光産  
業の一環として水産関連  
新産業を展開する場合は、  
首都圏から顧客と市場を  
三陸まで運んでもらえれ  
ばよい

ざつと、こうしたことを考  
えた次第である。

外資、外部人材、外  
部市場、首都圏顧客

なんだか非常にさびしい  
結論になってしまったが、  
当面は、「外資、外部人材  
外部市場、首都圏顧客」を  
頼って行くべきではないか  
ということになる。

復興は急ぐべきである。  
時間をかけていたら、取り  
残される。

東北も、特に三陸は、そ  
うした「外部力」をうまく  
取り込めるだろうか。

それとも、意固地になっ  
て、自分たちでやるから  
い、そうした「外部力」  
を排除してしまい、結果、  
復興が遅れることになるの  
だろうか。

いままさに、大決断の時  
だと思ふのである。



ブリのカレーソテー完成

第21回 水産業再興の  
ための料理レシピ紹介

【ブリのカレー  
ソテー】

これからの暑い  
季節にブリの  
カレー風味をぜひ！



郷土料理愛好家  
松本由美子氏

ー簡単レシピー

【材 料】 ブリ切り身 小麦粉 大1 カレー粉 小1/2 塩、コショウ 少々  
サラダ油 大2～3

- 【作り方】 ①ブリは、塩、コショウをふり、茶こしを使い小麦粉とカレー粉を  
合わせたものを両面にまぶします。
- ②ブリをフライパンで3～4分焼いたら、裏返し、両面を焼きます。
- ③フライパンの空いてるところで油を少し入れ、アスパラ、トマト、  
玉ねぎを焼きます。
- ④ブリと野菜を出来上がりに盛り付けします。

# 「イサの氾濫」

## 「まづろわぬ民」

### 小説「イサの氾濫」

木村友祐の「イサの氾濫」が未来社から3月11日に刊行された。40代になって東京での生活に行き詰まりを感じていた主人公の将司が、叔父の勇雄とイサに興味を持ち、故郷の青森・八戸に帰り、従兄弟や父親の幼馴染に話を聞いて、その足跡を辿っていく、というストーリーである。イサは方々で諍いを起こし、肉親にも敬遠され、どこにも居場所のなかった「荒くれ者」だった。将司はイサの孤独と悔しさに自分自身を重ね、さらに震災後の東北の悔しさをもその身に乗り移らせ、ついに「イサ」となつて怒りを爆発させる。

本作の初出は「すばる」(集英社)の2011年12月号で、第25回三島由紀夫賞候補作ともなったそうだが、その時は私はその存在を知らず、今回単行本になって初めて手に取る機会を得た。この小説の中で最も印象的な箇所として、登場人物の口から、蝦夷や東北の置かれた状況について語られる場面がある。

父親の幼馴染の角次郎は、イサのことをかつて東北に住んでいた蝦夷みたいな人間だったのではないかと将司に言う。その言葉に前のめりになる将司に対して、「今のは考え方の遊び」だと言いつつ、角次郎は蝦夷について語る。

「……蝦夷づのあ、ホントは西の、都のやづらがそっか呼んだだけで、本人だちは自分が蝦夷だとは思ってなかつたらしいけどな。産馬ど馬飼に長げでだから、馬さ乗つて弓ばあつかうのも得意な連中で、やだら勇敢な猛者がそろつていただ

都の連中にとっちゃ、自分たちの国の外さあつて、そつたら強い輩がゴロゴロいる蝦夷の国は、想像を超えだ野蠻の国だったのよ。まあ、国どいつても、それぞれ単独に動く部族の集まりで、抗争をくりかえすおんた感じだつたらしいんども。毛を着て血を飲む、兄弟同士疑い合う連中だと思われつたつ。朝廷は、天皇こそ絶対だという物語にしがたつて、その未開の国は何回も制服しようとしたんども、蝦夷あなたかた抵抗したべ。だすけ、蝦夷は都の連中には、『まづろわぬ人』どが、『あらぶる人』ど呼ばれでだよ。……な、イサみてえなもんだべ？」

その上で角次郎は、「今の東北には、あいつみてえなやづが必要だという気もする」と言う。それはどういうことかと尋ねる将司に角次郎は、「みな、人ツコよすぎるべ」と言つて、こう言う。

「こつたらに震災ど原発で痛めつけられでよ。家は追んだされるし、風評被害だべ。『風評』つても、実際に土も海も汚染されだわけだから、余計厄介なんどもな。そつたら被害こうむつて、まつと苦しさを訴えたり、なあしておらんどもがこつたら思ひすんだつて暴れでもいいのさ、東北人づのあ、すぐにそれができねえのよ。取材にきた相手さも、無理して前向きなご

と云うのよ。新聞もテレビも、喜んでそういう部分ばかり伝える。」

「……おらはもももど、生まれだ地域で人の性格うんぬんすんのは、ナンセンスだと思つてんども。だからこれは、そんでもやつぱり不公平でねえがどうい思いが言わせる、戯言みてえなもんだども。東北人は無言の民せ。蝦夷征伐で負けで、ヤマトの植民地さなつて。もももど米づくりさ適さねえ土地なのさ、稲作は主体どずる西の社会ど同じように、米、ムリクリつぐるごになつて。そのせいで人は大勢飢え死にするし、いづまでたつても貧しさに苦しめられでな。はじめで東北全域が手え結んで、薩長の維新政府軍ど戦つた戊辰戦争でも負けで。つまり、西さ負けつづけで。どこのだれが言いだしたんだが、『白河以北、一山百文』なんて言葉で小馬鹿にされで、暗くて寒くて貧しいと思われながら、自分だちもそう思いながら、黙々と暮らしてきたべ。……したんども、ハア、その重い口ば開いてもいいでねえが。叫んでもいいでねえが。」

この長大な語りは、まさに作者である木村友祐の「叫び」であるのだから、ちなみに、八戸出身で東京に出た主人公の将司は、まさに作者の分身であるし、イサのモデルは作者の叔父だそうである。東京から見た震災後の東北とその東

北を取り巻く状況を見て、全編を通して「東北よ、叫べ！」と叫んでいる。作者がこの小説を通じて訴えたかったことはまさにここにあるのに違いない。

### アルバム「まづろわぬ民」

この「その重い口ば開いてもいいでねえが。叫んでもいいでねえが」という声に込めた人がいる。白崎映美である。白崎映美は山形の酒田出身。上々颱風(しゃんしゃんたいふう)のヴォーカリストとして活動してきたが、上々颱風は2013年1月に活動を休止。そのような折に、この「イサの氾濫」と出会い、その「叫び」に東北人の血をたぎらせて、東北出身のミュージシャンらに声を掛け、「白崎映美&どうほぐまづりオールスターズ」を結成したのである。

翌2014年秋に1stアルバム「まづろわぬ民」を発売。2015年に「白崎映美&東北6県ろくろくショール!!」に改名して現在に至っている。「東北6県ろくろく」というネーミング、実に秀逸である。このアルバムはまさに、東北の「ロッキンロール」である。ロックのテイストと東北が誇る民謡のテイストがうまく融合し、独自の音世界が形成されている。

印象的な歌詞も随所に表れている。「どうほぐまづり」のテーマでは、「オラは歌うぞ皆踊れ/泣ぐ子はいねが皆踊れ/いづまで生きつがわがねぞ/明日ポツクリ行ぐがもわがねぞ」と歌う。「いづまで生きつがわがねぞ/明日ポツクリ行ぐがもわがねぞ」というのは、東日本大震災をくり抜けた多くの東北人の偽らざる実感であろう。そして、「泣いだ人ださしい事いっぺ来い/よいしよよいしよどいい事/引ばらて来い来い来い」と歌う。これこそ、白崎映美の東北に対する切なる願いなのであろう。

このアルバムの白眉は、アルバムのタイトルともなっている「まづろわぬ民」である。「まづろわぬ民」とは、「イサの氾濫」でも触れられているように、まさに蝦夷そのものことである。この曲で白崎映美はこう歌う。「ぎらぎらの目ン玉ど/真赤だ心臓ど/ほどぼしる力ど/ほほえみど/リンゴのほつぺど/寒さど強い体ど/あつたこハートを持ち/多く語らず恥づかしがりやで/気持ちの優しい民だ/抑え切れないこの衝動は/確かにあなた方の末裔だ」。

ここでは、白崎映美の思い描く「蝦夷」が独特の表現で描かれている。そしてさらに、「山漕ぎ野漕いで/自由に生きる/オラ方の先祖は/まづろわぬ民だ」と歌い、東北人の「原点」として「まづろわぬ民」があることが強く主張されている。

白崎映美はこのアルバムで「叫び」がここにはある。この2つの「叫び」が出会い、共鳴し合ったのである。当の木村友祐は「イサの氾濫」のあとがきでこう書いている。

「発表から四年半。書籍化の予定もなく、そのまま埋もれるはずだった『イサの氾濫』がこうして本としてかたちになったのは、何といつても、上々颱風のヴォーカリスト、白崎映美さんのおかげである。白崎さんは『イサの氾濫』を読んだことをきっかけに、『東北6県ろくろくショール!!』という東北を叫ぶ祝祭性あふれるバンドを結成した。そしてライブのたびに『イサの氾濫』のことを観客に伝え、ぼくをステージに上げて朗読までさせてくださった。筋金入りの東北思いの彼女との出会いがなければ、この本はできなかった」。

また、「まづろわぬ民」のライナーノーツでもこう書いている。

「震災で甚大な被害をこうむつても物言わぬ東北人には、歴史的に負ってきた悔しさがあつた。昔オラがたの祖先は、蝦夷つて呼ばれで、中央から、西から攻められた。んだげんども、オラがたは支配されな、迎合しない民つて呼ばれで。んでオラは、よし、んだ、今こそ、オラがだはでつつけえ声で立ち上つ時だと思つて、この歌をつくりました」。

木村友祐の「叫び」と共通する「叫び」がここにはある。この2つの「叫び」が出会い、共鳴し合ったのである。当の木村友祐は「イサの氾濫」のあとがきでこう書いている。

「発表から四年半。書籍化の予定もなく、そのまま埋もれるはずだった『イサの氾濫』がこうして本としてかたちになったのは、何といつても、上々颱風のヴォーカリスト、白崎映美さんのおかげである。白崎さんは『イサの氾濫』を読んだことをきっかけに、『東北6県ろくろくショール!!』という東北を叫ぶ祝祭性あふれるバンドを結成した。そしてライブのたびに『イサの氾濫』のことを観客に伝え、ぼくをステージに上げて朗読までさせてくださった。筋金入りの東北思いの彼女との出会いがなければ、この本はできなかった」。

また、「まづろわぬ民」のライナーノーツでもこう書いている。

「震災で甚大な被害をこうむつても物言わぬ東北人には、歴史的に負ってきた悔しさがあつた。昔オラがたの祖先は、蝦夷つて呼ばれで、中央から、西から攻められた。んだげんども、オラがたは支配されな、迎合しない民つて呼ばれで。んでオラは、よし、んだ、今こそ、オラがだはでつつけえ声で立ち上つ時だと思つて、この歌をつくりました」。

「おめは、生きでいいのせ。ニセモノだの、空っぽだの、役立たずだの、そんなものあんどんでもいい。人の目なんが知るが。反省もすな。身勝手でもなんでもイヤなものイヤど、思いつきり、叫べ、叫べ」。

木村友祐と白崎映美、二人の思いはまさにこの言葉に尽きるのだから。曰く、「東北よ、もつと叫べ!東北人よ、もつと叫べ!」我らの先祖が命を懸けて必死に守ろうとした何かに、すつかり飼い馴らされて野性を失つてしまったようにも見える今の東北人は思いを馳せるべき時なのかもしれない。

「東北よ、もつと叫べ!東北人よ、もつと叫べ!」我らの先祖が命を懸けて必死に守ろうとした何かに、すつかり飼い馴らされて野性を失つてしまったようにも見える今の東北人は思いを馳せるべき時なのかもしれない。

「東北よ、もつと叫べ!東北人よ、もつと叫べ!」我らの先祖が命を懸けて必死に守ろうとした何かに、すつかり飼い馴らされて野性を失つてしまったようにも見える今の東北人は思いを馳せるべき時なのかもしれない。

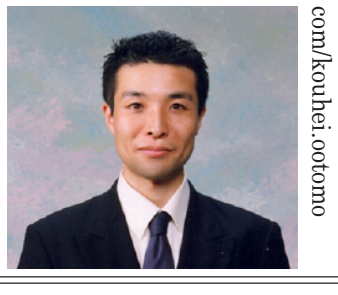
「東北よ、もつと叫べ!東北人よ、もつと叫べ!」我らの先祖が命を懸けて必死に守ろうとした何かに、すつかり飼い馴らされて野性を失つてしまったようにも見える今の東北人は思いを馳せるべき時なのかもしれない。

「東北よ、もつと叫べ!東北人よ、もつと叫べ!」我らの先祖が命を懸けて必死に守ろうとした何かに、すつかり飼い馴らされて野性を失つてしまったようにも見える今の東北人は思いを馳せるべき時なのかもしれない。

「東北よ、もつと叫べ!東北人よ、もつと叫べ!」我らの先祖が命を懸けて必死に守ろうとした何かに、すつかり飼い馴らされて野性を失つてしまったようにも見える今の東北人は思いを馳せるべき時なのかもしれない。

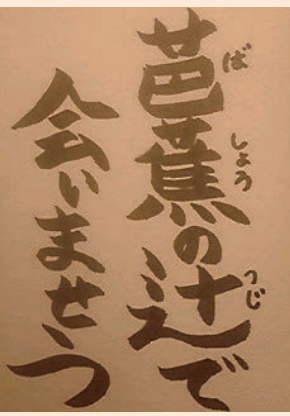
### 執筆者紹介

大友浩平 (おおともこうへい)  
奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。  
「東北ブログ」  
http://blog.livedoor.jp/anagmasi/



Facebook  
https://www.facebook.com/kouhei.ohtomo

連載  
むかしばなし



第三十六話  
鉄の三角

昭和三年の仙臺城下から、七百年前の文治五年の宮城野平原へやってきて三度目の夜が、近づいていた。夕方の空は灰色で雲は重く沈み、遠くで雷鳴も聞こえる。「ハチロクの熱が冷めぬえ・もうテンダーの水もなげいぜ。」

機関士は顔中の汗を制服の袖で拭う。備品の三つのバケツで、乗員らが川から水を運ぶが、北に流れる梅田川はなかなか遠い。列車の前後を遙か彼方まで一直線に無数の小石が高く跳ね上がっている奇妙



奥羽現像氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、仙台に移住。市内のケルト音楽サークルに所属し、あちこち出だし演奏する。フィドル(ヴァイオリン)担当

な現象は止んでいない。戯れに石の一つを空中で受け止めた乗客が、その熱さに悲鳴を上げて投げ出すと一日直線を離れた小石は二度と跳ね上がる事がなかった。

「雨だ、みんな客車の中へ入れ。」  
まだ明るいうちに降り出した雨は灼熱の巨大な鉄釜の上へ降りかかり、パチッパチッと弾け蒸発する湯気が機関車全体に立ち込める。「ひとまずは雨水で冷やせるか?」

「どうか・焼石に何とか、つとこじゃねえか」  
車掌室で乗員たちが話し合っている。  
「もう丸二日になる。乗客の我慢も限界に達するぞ」  
「まあしかし・みんなもう案外気楽に出かけてたが」

二日目ともなると、若馬タギ祝魚をはじめとする五人からなる数班だけでなく、自主的に結成された女性だけの班も試行錯誤しながら槍や鉞を自作して北や南へ散らばっていき、山や川から食糧を調達してくるのだった。

泰衡に拳銃を向けた末に捕縛された山浦琴洋も解放されて列車に戻っていた。

「夜になる・頼朝がこの宮城野に踏み込むのは明日だぞ・泰衡のボンクラめ」  
水滴に覆われていく窓を眺めながら、爪を噛む。

「もう既に名取川か、場合によっては広瀬川の対岸まで来ているだろう。まさに目と鼻の先だ!」  
乗客が一人また一人と車掌室に集まっていく。

「間に合うのか、あの坊主ら。どこか山の方にも避難した方がいい、マジメに」  
「まあまあ、よくよく考えたら別に殺されると決まっていたじゃないんだし・」  
「ばかたれこの、帰れなくなるべよ!ここを動いたらダメなんだって!」

祝魚と遊女は最後尾車両の展望デッキにいた。少年はまだ暗くならぬうちに、山鳥の羽根を新しく削った矢に取り付けている。  
女は話しかける。  
「平泉に行こうよ・この時代、東京も大阪もない。京都の次に立派な都がこの東北にあるんだ。見ておきたくないかい?」

「間もなく滅ぶんだろ・」  
「だから、その前にさ。」  
女は本と書いて「もと」という名だといった。名前

の通り遊廓内でも読書家であり、客からも様々な本をもらっていたらしい。この日は祝魚の班に加わり、全く野良仕事向きではないモダン・ガールの装いに替えを裂いて捲いた脚絆を巻いて山に入った。震災での吉原大火を生き延びただけあるというべきか身体能力は驚くほど高く、山奥まで祝魚についてきた数少ない者の一人だった。

「観光なんかしてる場合か。ここから北も、戦場さなる」  
「戦争か・あたしの父はあたしが生まれる前に奉天会戦で死んでね。この時代でも数え切れないぐらい、同じような子らが生まれてるんだらうね。」

祝魚は聞き流しながら注意深く矢頭に羽根を仕込んでいった。慣れない弓だったが、何とか空中に飛び立った山鳥を射抜く事ができたのだ。祝魚の村は貧しく、所有する村田式単発銃は三丁のみで、大半のマガジンは火縄銃か、無ければ槍を用いている。しかし忠衡から譲られたこの蝦夷弓を使ってみて少年はその意外な威力に驚き、古ながらあらためて狩猟具としての可能性を見出していた。

「そういうや、巴つてこの時代の人がだよね。木曾義仲は義経に討たれたらどうけど、巴御前は生き延びたかも」  
「誰だい、ともえって。」  
「女の騎馬武者だ。義仲の妾だったというけどね・心に決めた男の為に戦う、

女戦士。あたしの憧れさ」  
「さあ・実際にはどうだったか。軍隊の中の女なんて、遊女と同じにしか見られないんじゃないのか。」  
「あなたが頼朝に立ち向かうってんなら、あたしはあなたに従って女武者になつて命を張ってもいいよ。」  
「立ち向かうって!十萬騎引き連れた大将向かってか」

「何だい、小田原遊廓に乗り込んで幼馴染をさらおうなんて無茶苦茶言うくせに」  
「どちらが無茶苦茶かもうわからないが、前方機関車の辺りで騒ぐ声が聞こえたので、二人は三両の客車の乗客たちで賑わう中を通り抜けて向かった。

機関車はまだ熱を帯びて、雨粒を受けながらじゅうじゅうと湯気を上げていた。群がる乗客たちの一人に祝魚は尋ねた。  
「何騒いでる・」  
「西の平原に柿の樹が一本立っていて、採っても採っても次から次に柿の実が成るんだぞうだ・」  
「なんだって!」  
昼間出かけた班のうち、なかなか帰ってこない一班がようやく雨の中戻つてくると、彼らの籠やら風呂敷やらが柿の実でいっぱいになっていて、というのだ。  
「どうい柿なんだ・」  
「食って大丈夫なのか」  
柿を囲んで言い合っている男らの間に、祝魚は割って入る。

「どこさあった、その樹」  
「青葉山が見える・国分町辺りのなあ、ちょうど芭蕉の辻の所だと思ったが」  
「芭蕉、の、辻・」  
「その樹の上に、柿の実そつくりの色をした顔の男がいてな、小次郎を連れてくれば、この実の渋みが取れて食べるようになるぞって」

「小次郎?」  
「自分は鉄の三角に囚われたので、たまげた力を得ているが、動けなくなつてしまつて伊達の小次郎のところにまでは行けない、と。」  
「伊達の小次郎!・泰衡さんか!」  
本が横から訊いた。  
「くろがねのさんか・」  
「さつぱりわからねえな。とにかく泰衡さんを連れていってやらないと・」  
「しどこさいる?もうとつくに北へ逃げたんじゃねえのか・」

今純三は石垣の上に立つ影を認めて、思わず叫んだ。  
「芭蕉さん!サーカスのおやつさん!ここにおつたのですか・」  
怪僧は遙か上から応じる。  
「やあ、今さん。ご無事でしたか。」  
「ここが、大天狗の砦・」  
「二人こそ、大丈夫ですか」  
「何とか無事です。大天狗殿は、外出中ですが・」  
盲目のチャンネルラが鋭く呼びかける。

「イアンパヌを自覚めさせたい?そちらのチャンネルラは・」  
「いや、それがですな」  
芭蕉が何か言葉に詰まっている間に、トヨが麒麟に飛び乗り、チャンネルラを後方へ促して純三には神獣のたてがみを掴ませた。次の瞬間、馬や羊、鳥が合体した生き物は荒々しい石垣を蹴りながら一気に怪僧らの元へ駆け上がった。あつという間に上段へ達すると、麒麟の形が崩れ始め、均衡が失われかけた。「あつまずい、麒麟が北山の化け猫に戻つてしまふ」  
憲家が老体とは思えぬ俊敏さで落ちかけた純三の上着を掴み、助けた。チャンネルラは自ら跳んで城内床へ着地し、トヨの腕は芭蕉が受け止め、引つ張り上げた。

「もともと化け猫ですから、それなりの姿には落ち着きましよう。」  
トヨが余裕で微笑んだ。  
「記憶、戻られましたか。」  
トヨ殿  
麒麟の姿は消滅して、両手でない抱えられないような大ききの黒猫が一匹いるだけだったが、背中に白い翼だけは残っていた。  
「今までの三十二回分の人生、全ての記憶・嫌という程ね。これも魔界にいる今だけの事でしょうが。」  
「それでイアンパヌは」  
チャンネルラは即座に訊いて来た。  
「牢獄のチャンネルラ殿が、

内面におられるというイアンパヌ殿を呼び出そうとしたのだが・呼びかけに応じぬ、との事でした。」  
「何ですって!そんなはずはない・」  
「それで、大天狗殿はともかくもチャンネルラ殿を牢から出し、共に砦を出られました。頼朝を迎え撃つ御意志のようです。」  
息を整えた純三が、遠慮がちに尋ねた。  
「それで・石は、置けましたか。」  
「いえ、それがまだなので。大天狗殿に条件を出さず、ここからは、為すべくもござらぬな。」  
しばし霧の中を凝視していると、心が吸い込まれるような感覚に襲われる。源氏一族で、土蜘蛛退治で知られる頼光の事を、頼朝は思い起こした。大天狗退治か・俺にできるのか?その時、葛西清重が霧の中を指して叫んだ。  
「鳥です!・大群です。」  
上空に、黒い翼の群れが無数に現れ、不気味な鳴き声が峡谷に反響し始めた。

都市不在の芭蕉の辻に更なる驚きの現象が!それにしては雨の中、泰衡はわざわざ柿を採りに来てくれるのか!??

一方、名取川と広瀬川に挟まれた、郡山に閉じ込められた恰好の頼朝は、夕刻

次回予告

都市不在の芭蕉の辻に更なる驚きの現象が!それにしては雨の中、泰衡はわざわざ柿を採りに来てくれるのか!??



シリーズ 遠野の自然  
「遠野の立夏」  
遠野 1000 景より



桜並木

ゴールデンウィーク後半の五月五日は男の子のお祝いである端午の節句であり、また子どもの日でもありませんが、二十四節季でいえば立夏にあたります。暦上はいよいよ夏ということになります。

\*

ところでこの端午の節句は、奈良時代から伝わる慣習でしたが、元々は女性が行っていたといわれます。田植えの時期である五月になると、稲の神様に豊穣



SL 銀河 荒谷前 岩手二日町間



河川焼却

を祈願するため早乙女と呼ばれる若い娘達が小屋や神社に籠って田植えの前に穢れを祓う「五月忌み」という風習が行われていました。またその時代には、古くから邪気祓いの力があるとされていた菖蒲と薬草のヨモギを軒に挿すことで厄災を祓い、穢れを浄化できる

\*

と考えられていました。しかし、後に武士の台頭とともに「菖蒲」は、武道を重んじる「尚武」に通じるということ、男の子のお祝いに転じたということのようです。

また立夏では、山野では新緑が目立ちはじめ、風も

さわやかになっていよいよ夏の気配が感じられるようになるといわれます。

現に筆者も、この原稿を書いている時分、車での通勤時、雨上がりの直後など、遠くの山々の新緑が鮮やかに目に染み込んでくると感じるようになってきました。

一方、遠野の立夏はどうでしょうか？ 桜の開花は少し遅れたようです。四月下旬での開花でした。

花々が咲き乱れる様子は、前月から続いています。ミスバショウ、ニリンソウ、カタクリ、白いシラネアオイなど、今月は特に白い花が多いようです。

しかし東京圏の今年の立夏前後の天候は、激しく変動し、寒暖の差が激しく、又突然の突風で、連休初日は電車のダイヤが大混乱したりしました。

一方、遠野の立夏はどうでしょうか？ 桜の開花は少し遅れたようです。四月下旬での開花でした。

一方、自然木を活かした鳥居はやはり遠野ならではの風景でしょうか。人がぐり抜けるには低すぎる気がしますが、誰が通り抜けるのでしょうか。



鳥居



水ズバショウ



白いシラネアオイ



カタクリ



ニリンソウ

# 石巻に新しい復興の風を

若者が中心となって立ち上げたNPO法人が  
新しい手法で風力発電所開発に挑戦する!  
-NPO法人STELAのプロジェクトのレポート8-



シンポジウムは多くの市民に関心を寄せていただき大盛況となった。

「第4の革命」というタイトルのドキュメンタリー映画がある。

これまで人類が経験してきた農耕、産業、情報に続く革命がエネルギーの革命であり、その狼煙は世界中で立ち上っているという。

福島第一原発事故があった日本ではどうだろうか。原発の撤廃どころか再稼働を進め、海外への原発輸出と事故の保障と今後もありスクは広がるばかりだ。

今号では4月2日に東北大学さくらホールで行われた自然エネルギーのシンポジウムの様子を取り上げる。

震災、FIT、電力自由化と様々なターニングポイントを通過し、国内各地でも変革の芽が出始めている。

## 国内の自然エネルギー開発の開拓者

シンポジウムの基調講演は認定NPO法人環境エネルギー政策研究所(ISEE)の所長を務める飯田哲也さんだ。

飯田さんは未来の社会はどうあるべきかという視点で今の社会とエネルギー政策へ提言を行い、言葉だけでなく具体的なアクションを持って実績を残してきた。

その一例が国内で初めて完成した市民出資による風力発電所とそのビジネスモデルの確立だ。

その革新的な実例は魁となる北海道から全国に飛び火し、全国各地で始まっている市民参加型発電所のモデルとなっており、ISEPはその実現のバックアップを行っている。

基調講演では国内で進められている原子力政策とは逆に、世界で起きている自然エネルギーの躍進的な普及と対比し、事故や核廃棄物の処理、施設の補強等の莫大な費用によって経済的に見合わなくなっている原子力産業と技術革新と市場拡大によって時間と共に安価になる自然エネルギーの可能性を話された。

これまで行われた大規模集約型から自然エネルギー主体の小規模分散型へシフトすることで地域内でお金が循環し、燃料費等で地域外へ出ていたお金を街をより住みやすくする分野へ投資することもできる。

また自然エネルギーの普及は経済的な優位性だけでなく、温暖化等の社会問題への有効な対策にもなり、将来世代へ安心・安全な社会を残す新産業となる。

各地で立ち上がる団体を連携させ、お互いに力を合わせることで更にこの動きを加速させようとするのが全国ご当地エネルギー協会。その代表を務めるのが福島県の豊かな自然に囲まれた会津喜多方で、大和川酒造店を営みながら会津電力株式会社を立ち上げた佐藤彌右衛門さんだ。

福島県にはこれまでおよそ三千億円もの交付金があったが、ひとたび起こった事故による取り返しの付かない過ちと信用はお金で回復できるものではない。

原発の暴走を許した責任を次世代の負担としない為に、県内の電力需要を全て自然エネルギーだけでまかなう体制を作るため、佐藤さんは有志を集めて立ち上がったのだ。



シンポジウム後の交流会では各団体と行政の担当者県議会議員、参加した市民等の間で様々な繋がりができた。

## 各地で立ち上がる新たな電力会社

新たに設立された小さなNPOによる運動を含めると、震災後に立ち上がった新規の電力会社はおよそ200社に上り、昨年10月までに稼動した発電所は800箇所になるといわれる。

この数字に我々のNPOは含まれていないのだから水面下で動いている計画が本格的に動き出した際にはどれだけの社会的インパクトを持つだろうか。

まさに革命前夜。日本はその只中にある。

佐藤さんは講演において

福島の、とりわけ会津における豊かな水資源だけで県内の必要電力を全てまかなう試算ができることを示し、余剰電力を地域外へ売電することで福島を豊かにすることができるとい

可能性について話された。

佐藤さんに続いて、宮城県の政策紹介と題して宮城県再生可能エネルギー推進室で技術補佐を務める伊藤健治さんより、行政による自然エネルギー開発促進のための補助金等の取り組みが多数紹介された。

シンポジウムでは基調講演のあとに宮城と福島における自然エネルギーの実践者によるパネルディスカッションが設けられ、プレゼンテーションが行われた。

県南の丸森町筆甫地区の住民が立ち上げ、太陽光発電所を計画しているひつば電力株式会社。

仙台で初めてとなる市民出資による太陽光発電所を実現させ、同市内の保育園で2号機の稼動も実現させたNPO法人きらきら発電。川崎町で小水力発電の実現とバイオマスの活用、山林の蘇生のための伐採など様々な環境活動を行うNPO法人川崎町の資源をいかす会。

生活に根ざした省エネや、自然エネルギーを主題とする映画上映会の開催はじめ市民の視点で様々な取り組みを行い、事業として農薬や化学肥料を使わず地産地消の物産の宅配を展開し、放射能の自主測定にも取り組む生協あいコープみやぎ。今も全村避難に見舞われながらも村民が中心となって立ち上がり新産業創出を目標に太陽光発電事業を開始した飯館電力株式会社。

大きなビジョンと確かな実績を出している方々の中で我々のプロジェクトもお話させて頂いた。

会終了後の交流会等を通して新たなつながりができ、固い握手を交わすと共に激励の言葉を頂戴した。

主催となったエネシフみやぎは今後事業者間の関係を密にし、応援していく方針を先日の定例会において代表の浦井彰さんから伝えられた。

本シンポジウムは地方新聞である河北新報とみやぎテレビで取り上げられ大成功のうちに幕を閉じた。



パネラーとして登壇する機会を頂き講演

## イベント紹介

5月22日14時から当法人の総会を仙台市にある東北学院大学サテライトスタジオにて行うことになった。

これまでどのようなことを行ってきたのか、またこれからどんなことを行っていくのかを初めて参加する方にもわかるように時間の許す限りお話をさせていただきます。

参加申し込みやお問い合わせは npostela@gmail.com までお気軽にご連絡を。

## 来月号の記事

来月号では総会の様子と今後の活動ビジョンについて執筆する予定である。

## 寄稿者プロフィール

東梅祐也 (とうばいゆうや) 石巻市出身。

エンジニアを志し、石巻工業高校電気科、東北学院大学電気情報工学科、同大学大学院にて修士号を取得。現場での仕事に従事するために博士課程を中退する。

幼い頃から動物が好きで、将来は環境問題の解決に貢献できる仕事につきたかったが、徹底した現場人間のため、大学院時代に社会問題の現場を肌で感じるために環境問題・戦争・貧困をテーマに地球一周の一人旅へ。

帰国後は反原発、植林、ゴミ拾い、反戦デモにチ

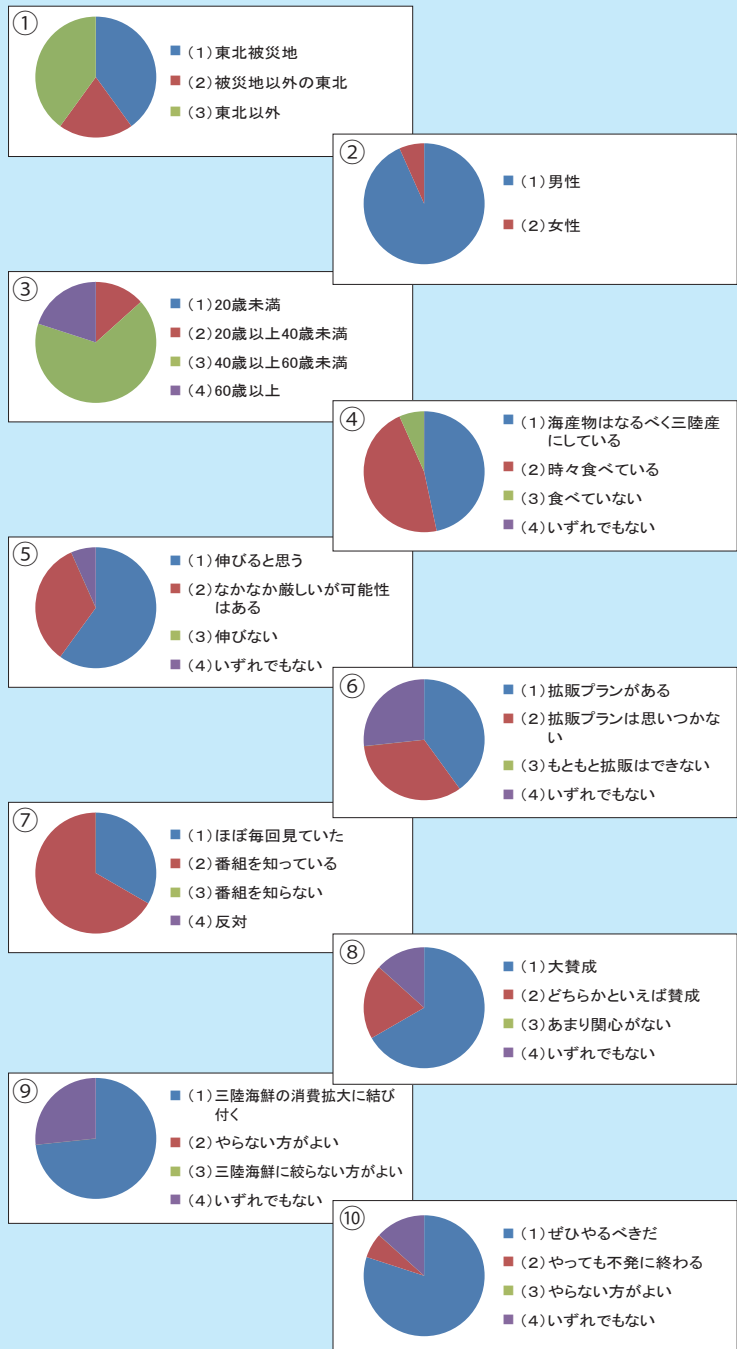


ヤリテイサンタ、自身の旅のトークライブなど様々な活動を行う。その後風力発電専門のエンジニアとなり、主にメンテナンスに従事。東日本大震災を機にエンジニアを退職してからは宮城に戻り現法人設立。現在は理事として活動している。

## 第47号 ネットアンケート集計結果

### 【三陸版の『料理の鉄人』企画について】

NO.	質問と選択肢	回答数
①	住所	
	(1) 東北被災地	6
	(2) 被災地以外の東北	3
	(3) 東北以外	6
②	性別	
	(1) 男性	14
③	年齢	
	(1) 20歳未満	0
④	三陸の海産物を食べているか?	
	(1) 海産物はなるべく三陸産にしている	7
	(2) 時々食べている	7
	(3) 食べていない	1
⑤	三陸の海産物は今後消費が伸びるか?	
	(1) 伸びると思う	9
	(2) なかなか厳しいが可能性はある	5
	(3) 伸びない	0
⑥	三陸海産物の画期的な拡販プラン	
	(1) 拡販プランがある	6
	(2) 拡販プランは思いつかない	5
	(3) もともと拡販はできない	0
⑦	『料理の鉄人』というTV番組について	
	(1) ほぼ毎回見ている	5
	(2) 番組を知っている	10
	(3) 番組を知らない	0
⑧	『料理の鉄人リバイバル』の東北開催	
	(1) 大賛成	10
	(2) どちらかといえば賛成	3
	(3) あまり関心がない	0
⑨	『東北版—料理の鉄人—』を三陸海鮮素材にしての開催?	
	(1) 三陸海鮮の消費拡大に結び付く	11
	(2) やらない方がよい	0
	(3) 三陸海鮮に絞らない方がよい	0
⑩	『料理の鉄人—三陸海鮮シリーズ—』について	
	(1) ぜひやるべきだ	12
	(2) やっても不発に終わる	1
	(3) やらない方がよい	0
	(4) いずれでもない	0



『料理の鉄人—三陸海鮮シリーズ—』は「ぜひやるべき」という結果

今回は「三陸版の『料理の鉄人』企画について」。

三陸水産産業復興イベントで復興に役立てようとするも今まで出尽くしてネタ切れで新鮮味がない。どんな企画ならば効果が出るのか、筆者なりに考えて出したのがこれ。回答者は十五名。

④ 「三陸海産物を食べている？」は「なるべく三陸産にしている」と「時々食べている」が同数で約46.7%。

⑤ 「三陸の海産物は今後消費が伸びるか？」は「伸びる」が60%、「厳しいが可能性はある」が約33.3%。

⑥ 「三陸海産物の画期的な拡販プラン」は「ある」としたのが40%、「思いつかない」が約33.3%。

⑦ 「TV番組の『料理の鉄人』を、「知っている」が約66.7%、「ほぼ毎回見ている」が約33.3%。

⑧ 「『料理の鉄人リバイバル』の東北開催」は「大賛成」が約66.7%。心強い。

⑨ 「『東北版—料理の鉄人—』を三陸海鮮素材にしての開催」は「三陸海鮮の消費拡大に結び付く」が約73.3%。

⑩ 「『料理の鉄人—三陸海鮮シリーズ—』は「ぜひやるべき」が80%となった。最期の『料理の鉄人—三陸海鮮シリーズ—』は8割の回答者が「ぜひやるべき」との結果は非常に喜ばしい。

### 編集後記

熊本地震には筆者も大変心を痛めている。

本震の後の余震がずっと継続する状況には耐えがたい思いであるかと推察する。

筆者も、3・11の約一カ月に、宮城北部にある実家に数日宿泊した際、毎日昼となく夜となく、余震が頻発して、ストレスが溜まった思い出がある。

最初は、震度5とか4に驚いているが、しまいに驚かなくなる。

しかし、それは余震に慣れるよう強制的に自己コントロールをしているせいであり、東京に戻った時にはほとんどほっとして、脱力してしまった記憶がある。

被災地で、余震の続く日々を過ごしておられる方々には、心から、早く余震が終了するようお祈りしたい。

余震が長引くと、心身に明らかに変調をきたしてくると思う。特に、子ども、老人、女性に顕著である。くれぐれも、暖かく見守ってやって欲しいと思うし、可能ならば、長期避難をして欲しいと願う。

人間はそんなに強く出来てはいないことを、いま被災地で、身をもって感じておられることだろう。

先行きが見えず、頼るべきものもない中で、心身ともに疲労の極に達しておられる方々に、事態が一刻も好転することを祈念する。

### 「東北を世界に！」プロジェクト募集

#### プロジェクト募集要領

- ① 東北の復興、活性化、再興を目的としたプロジェクト企画であれば、何でも可
- ② 応募資格は特に定めず、被災地、被災地以外の居住も問わず、国籍・年齢・性別を問わず
- ③ 企画書のようなものがあれば可---形式自由(プロジェクト名、プロジェクト期間、目的、どうやって実現するかの手段、仲間などを明記していただきたいと思ひます)
- ④ 〆切はとくに設けません

### 「東北を世界に！」プロジェクト募集

#### 連絡先/企画提出先

(郵送) 〒207-0005  
東京都東大和市高木3-315-1  
ホームタウン宮前2-2  
電子タプロイド新聞【東北復興】宛  
(メール) yumuyu@wj8.so-net.ne.jp

ご提案いただいた企画については、当新聞で責任をもって検討させていただいた上で、企画開始に向けてのしかるべき方法・手段をご提案するなり、企画実現のための仲間を募ってまいりたいと考えております。また、当新聞でご紹介させていただきたいと思ひます。(氏名公表か非公表かはご相談)

たくさんのご提案をお待ちしています